

大都市・神戸をおそった「阪神・淡路大震災」

●神戸をおそった戦後最大の震災

1995年1月17日午前5時46分、淡路島北部を震源としたマグニチュード7.3の大地震が発生しました。この地震は、神戸市をはじめとした兵庫県南部の地域に大きな被害をあたえました。最も揺れが大きかった地域の震度は7に達し、死者6400人、被災者の総数は30万人にもおよびました。これは、1923年9月1日に東京をおそった関東大震災（マグニチュード7.9、死者14万人）以来の、そして、戦後では日本最大の震災となりました。神戸港や、ポートアイランド、六甲アイランドなど臨海部の被害は特に大きく、急激な地盤沈下や液化化現象（地中の砂や水が地上にふき出す現象）も見られました。

●たおれたビル、断たれた「ライフライン」

阪神・淡路大震災では、強い揺れにより、たくさんのビルや建築物がたおれました。たおれた建物の下じきになってなくなった人も多く、生き残った人々の中にも、住むところを失ってしまった人が少なくありませんでした。さらに、電気やガス、水道など、毎日の生活に欠かせない命づなともいえる「ライフライン」も、地震によって使えなくなってしまいました。人々は、真冬のこごえるような寒さの中、避難所に集まり、避難生活を始めました。しかし、水や食料、衣類や毛布など、生活に必要な物は十分には行きわたりませんでした。



●人々を救った「ボランティア」

そのような中、神戸の人たちを助けるために立ち上がったのは、日本各地からやってきた「ボランティア」の人たちでした。ボランティアとは、主に無償で（お金などをもらわず）自分から進んで他人や世の中のために活動することをいいます。阪神・淡路大震災では、全国から100万人をこすボランティアの人たちがかけつけました。「たき出し」をして避難所の人たちに食料を配ったり、水をくんだり、お年寄りや身体の不自由な人の世話をしたり、ボランティアの人たちは、神戸の人たちといっしょに、力を合わせてさまざまな活動を行いました。こうして、たくさんの人々の力で、神戸のまちは少しずつ立ち直っていきました。

●災害に備えたまちづくりを目指して

現在、神戸市では、災害のときに十分な水を使えるように、屋上にプールをつくっている学校もあります。このように、神戸では、阪神・淡路大震災を教訓として生かし、災害に備えたまちづくりが進められています。

